

映画監督

樋口

HIGUCHI  
Shinji

真嗣

さんに伺いました

聞き手

苗村 由美  
編集委員野中 康弘  
編集委員[writer] 駒崎 文男  
[photo] 野中 康弘映画『カメラ 大怪獣空中決戦』や『日本沈没』などを撮られた樋口監督に  
建造物を壊す側の視点からみた土木について伺った。2010年5月24日(月)  
東宝スタジオ

怪獣物は

幼少期の破壊願望の代弁者だった

——特撮に魅了されるようになったきっかけは  
何ですか。

**樋口**——ゴジラやウルトラマンが流行った頃、私は小学生で、一番影響を受けやすい年頃でした。ウルトラマンと怪獣が戦ってまちが破壊されるシーンは、自分の幼少期における破壊願望、破壊衝動の代弁者としてありました。でも、そのうちにだんだん予算がかけられなくなり、野原や山で戦うなど、建物を壊さなくなっていました。それで飢餓状態になっていたときに出会ったのが『日本沈没』（1973年）という映画でした。いわば日本全部を破壊するみたいな話でしたから、待っていましたという感じでした。

た。今考えると不謹慎な子どもでしたね。

『日本沈没』で印象に残っているのは、東京に地震が起こり、海拔ゼロメートル地帯にある江東区あたりの堤防が切れ、鉄砲水が襲ってくるというシーンです。実際は海拔ゼロメートルでは堤防が切れても水は堤防より上には出てこないのですが、そこは映画の『けれんみ』というか、盛大に水が噴き出してくる。そういうフィクションを楽しんでいました。

**アグレッシブに存在を主張している  
ものに魅力を感じる**

——監督された『日本沈没』（2006年）のインタビューで、「都市は時代と地域性を現す顔」と語っています。監督が破壊したい衝動に駆られる日本を象徴する都市とは。

**樋口**——どこを破壊するかということは、ある意味役者さんを決めるのと同じくらい重要で、

毎回議論になります。1995年に公開された平成カメラシリーズの第1作『カメラ 大怪獣空中決戦』では、敵のギャオスという怪獣が鳥のような習性を持っていて、産卵のために人口密集地に現れ一番目立つところに巣をつくるという設定になっていました。当時再開発ブームということもあり、脚本の伊藤和典さんが最初に設定していたのは、大川端リバーシティ（東京・中央区）でした。確かに絵にはなるとは思ったのですが、東京の象徴としてはやっぱり東京タワーがいいのでは、と私から提案しました。そして、東京タワーに巣をつくり、そこから転がり落ちるように降りてきたまちとして、麻布十番の商店街を舞台にしました。首都高速など東京を象徴する近代的建造物と昔ながらの商店街。なかでも活きたまちの景観として愛してやまなかったのが、複雑に絡み合った電柱と電線でした。そうしたアグレッシブに存在を主張しているものに撮る側としては魅力を感じます。

## 破壊するときもつくるときと同じように 構造物の特性を考える

——印象的な破壊シーンを撮るためにどんなことをされていますか？

**樋口**——構造物を破壊するといってもやみくもに破壊するだけではないんですよ。たとえば、ビルであればアメリカでのビルの発破解体の映像を見て、崩れ方やバランスを崩したときのゆがみ方を研究するなどします。

それから、実在する構造物を破壊しようとすると、なかなか許可が下りなくて困ることが多いんですよ。つくる側としてはつくった構造物に自負がありますから、おいそれと許可

できないのは当然といえば当然です。なので、東宝の怪獣映画ではよくダムを壊しますが、映画のなかとはいえ「破壊させてください」と頼んだところで、うんと言ってくれるところなど一つもありません。ですから、映画ではいろいろなダムの、絵になりそうなところを組み合わせて、オリジナルの「俺ダム」みたいなものをつくっています。

## 構造物をつくっている様子は もっと見せたほうがいい

——破壊する話ばかりでなく、巨大構造物をつくる土木の建設過程を映画にできないもので

しょうか。

**樋口**——今、犬童一心さんと撮っている『ほの城』はまさにそんな映画です。今の埼玉県行田市に位置する忍城を、石田三成が農民を駆り集めて、川に堰き止め堤をつくり水攻めにするという話です。ただし、実際にこの時代のもので残っている堤を見ると、俵に土を詰めてそれを積んで埋めただけで絵になりません。そこで現代の土木の工法を取り入れて、当時からあり得そうな説得力のあるフィクションで、迫力あるシーンを撮っていいことと思っています。

私自身、工事現場が大好きで、映画のなかでは必ず絡めるようにしています。実際に土木工事の現場見学にはよく行って、江戸川の放水路や建設途中の首都高速の大橋ジャンクション、小田急線下北沢駅の工事現場でシールドマシンも見に行きました。実写とは別にアニメの『エヴァンゲリオン新劇場版』にも参加しているので、ダムの保守用のインクラインや、ジオフロントなどにも見学に行きました。

建設現場を見ていて、私が残念に思うのは防音壁などがあって中が見えないところが多いことです。つくっているときに格好いいのですから、土木工事はずっと隠さずどんどん見せてほしいですね。見せる工事があってもいいんじゃないでしょうか。これからも、私たちが構造物を破壊するためにも、日本の都市を象徴するような魅力的な構造物をどんどんつくっていただきたいと思います。



### 樋口 真嗣(ひぐち・しんじ)さん プロフィール

映画監督・映像作家、特技監督。東京都新宿区生まれ、茨城県立古河市出身。古河第三高校卒業後、『ゴジラ』で怪獣造形に携わる。『王立宇宙軍 オネアミスの翼』で助監督。『ガメラ 大怪獣空中決戦』で日本アカデミー賞特別賞受賞(特技監督)。映画『ミニモニ。 THEムービー』、『日本沈没』など監督。『エヴァンゲリオン新劇場版：序』の画コンテ担当。